【資料紹介】宮古島市総合博物館所蔵の稲村賢敷発掘資料について
―資料の概要、調査活動との関係性―

宮古島市総合博物館学芸員　湯屋秀捷

はじめに

稲村賢敷（1894～1978）は、『宮古島庶民史』、『琉球諸島における倭寇史蹟の研究』、『宮古島旧記並史歌集解』、『沖縄古代村落マキョの研究』など、現在の郷土史研究に欠かすことのできない著作を残し、慶世村恒任とならぶ宮古郷土史研究の先駆者として評される。

稲村の研究の特徴は、宮古の郷土史研究において、古文書やアヤグ等の口承だけではなく、遺跡の発掘活動とそれに基づく出土品といった、文書とは異なる物的証拠に注目した点にある。これは、稲村が心血を注いだ倭寇の研究において、倭寇自身が文書等による記録を残すことがなかったという前提を稲村が設定していた部分が大きいと思われるが、山本も評価するように、稲村の発掘活動は戦後の沖縄県でも貴重な事例である（山本 2023:64）。

稲村によって収集された考古学的資料は、現在宮古島市総合博物館に収められている。これらの資料は 2013 年に作成された『宮古島市総合博物館収蔵資料目録―歴史資料編―』にまとめられているが、これはあくまで目録であり、資料の状態についてまとめられたものではない。

そこで本稿は、稲村賢敷の生誕 130 年に合わせて、現在宮古島市総合博物館に収蔵されている稲村賢敷収集資料（以下、稲村資料）および稲村資料と考えられている資料について紹介し、資料の全体像を改めて提示するとともに、今後の稲村資料の検討に資することを目的とする。

なお、資料のリストについては先に記述した目録を参照いただきたい。

１．稲村資料の概要、来歴・これまでの整理作業

1－1．概要

現在、稲村賢敷の収集した資料は、図書資料は宮古島市立図書館へ、考古学的資料は博物館へ収められている。

考古資料は、ポリ袋に入れられた状態で、プラスチック製コンテナボックスあるいは稲村が使用していた木箱に収められている。木箱側面には「琉球政府宮古図書館」および購入日が記載された紙が貼られており、図書館の備品として購入していたことがうかがえる。

2013 年の目録作成作業の記録によれば、稲村資料の総点数は 1602 点で、大多数が土器ないし陶磁器片である。詳細は後述するが、発掘地は宮古島をはじめ、西表島、波照間島、竹富島、久米島となっている。また、一部の資料は、稲村が実際に遺物の整理ないし保管に使用したと考えられる布製の袋とともに保管されている【写真 1】。

【写真 1】遺物用の布製袋

1－2. 来歴・これまでの整理作業

木箱の墨書を参照すると、資料が宮古図書館に寄贈されたのは 1958 年 5 月であり、稲村が琉球政府宮古図書館の館長であった時期である。稲村が図書館長を退職し、生活の拠点を那覇に移したのは 1961 年のことであるから、退職前から発掘を行った宮古に資料を残す意図があったと思われる。この他、ポリ袋にも「稲村　1958.5」と記述が見られるものもあるため、木箱に入る資料以外にも相当な数の資料があったことがうかがえるものの、ポリ袋に資料が入れられた時期や、袋中の資料の発掘地等は判然としない。

資料はその後、1989 年の平良市総合博物館開館に際し、博物館へ移管されたようである。移管以後、稲村資料に関する整理や調査等は行われず、移管当時のままであるという。ポリ袋の記述や資料の収蔵状態は、移管当時のままとみてよいだろう。

博物館の開館以来、稲村資料に限定した目録等の作成作業に関する記録が見当たらない。開館して 20 年以上が経過した 2013 年の『宮古島市総合博物館収蔵資料目録―歴史資料編―』(宮古島市総合博物館 2013) 作成作業にてはじめて点数がまとめられた。

目録作成作業は稲村資料のリストが作成されたものではなく、総合博物館が所蔵する歴史資料の目録として作成されたものであるため、稲村資料の詳細をまとめたものではないが、大まかな範囲で遺物の種類および器形に関する分類がなされている。この分類は移管当時からあったポリ袋等にある記載を元に行われたものであることが聞き取りにより分かっている。

2013 年の目録作成作業をもって、稲村資料の存在が改めて明らかになったが、資料の中には稲村資料であることは間違いないが、発掘地名や発掘年の情報がないもの、そもそも稲村による発掘資料かどうか不明なものも含まれる。

２．資料の内容

前章で述べたが、稲村資料は博物館の資料番号が割り振られ、若干の整理がされているものの、その状態についてはまとめられていない。

そこで本章では、本稿の目的である稲村資料の全体像を提示するために、資料の内容および状態について述べる。

2-1. 資料番号、目録上の総点数および分類について

現在総合博物館で稲村賢敷発掘資料として目録に掲載されている資料は、H1-74～240、167 件 1602 点である。資料番号は 2013 年の目録作成作業の中で採番され、登録されたものである 1)。

資料分類は基本的にポリ袋等に記載されている情報に基づいたものになったようである。

資料番号は遺物の種類毎に分類され採番されたもので、それぞれの遺物が入っていた袋、木箱の情報が併記されている。

2-2. 資料の収集場所

資料の収集場所は、資料を入れた箱側面の墨書や、資料に貼り付けられた紙片、遺物を入れたと思われる布製の袋の墨書から読み取ることができる。現時点で資料から確認できる資料の収集場所の一覧が**【表 1】**である。

島名	発掘地名
宮古島	四島の主墓
	久松巨石墓
	上比屋山
	保良元島
	テラフグ御嶽
	たいや一原
	西ミヌ島
石垣島	大浜字大浜
竹富島	牛岡
波照間島	オヤケアカハチ屋敷趾
	スムタバル城跡
	名田大氏旧趾・プルブチ城趾・ナリヤ鍛冶趾
	アラブチ城趾
	ヤグ村旧趾
	オヤミシヤ赤多那
久米島	具志川城

【表 1】稲村資料の収集場所

2-3. 資料から得られる情報

資料の発掘地に関する情報は、資料毎の注記が手掛かりになる場合があるが、稲村資料の場合、資料に直接注記がされた資料はない。先述のとおり、一部の資料には発掘地、発掘年月日、所感の書かれた紙片が張り付けられている。一部の紙片には「稲村」の印がある【写真 2】。

【写真 2】資料に貼り付けられた紙片

紙片の貼られている資料は全体でみればごく一部で、さらに紙片そのものも破れ等の劣化が激しく、断片的にしか情報を読み取ることができないものが多い。

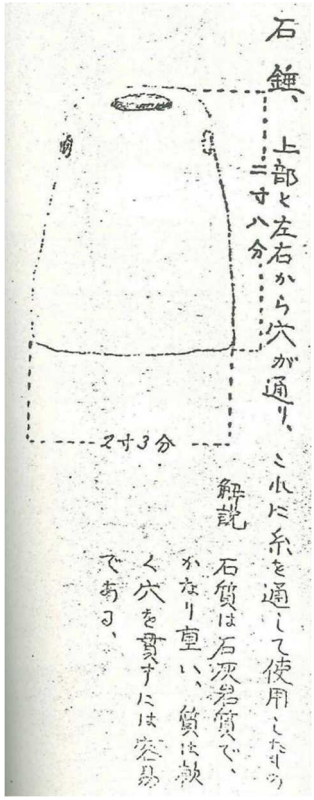
2-4. 個別資料について

箱書きや布袋、遺物に貼り付けられた紙片から収集地の情報を得ることができるが、稲村資料の多くは収集地が定かではない。

また、目録に基づく資料分類や発掘地は、より細やかな分析が必要とされる。例えば、資料番号 H1-111 は「宮古式土器」とされているが、発掘地は「竹富島　牛岡」であり、分類と発掘地の整合性がとれない。筆者の観察では宮古式土器ではないように思えるが、個別資料の分析にはより考古学の知見が必要であり、推測の域を出ない。

一方、全体でみればごく少数であるが、収集地が不明であるが、文献を参考に収集地が明らかになる資料もあった。具体的には、『久松巨石墓発掘記録』に掲載されている遺物である。

『久松巨石墓発掘記録』には、出土遺物の図が掲載されており、実物資料との照合がある程度可能となっている。例えば、H1-74 が採番された石器のうち、石灰岩を素材とする頂部を欠いた円錐形の資料は、『久松巨石墓発掘記録』において図面とともに報告される「石錘」と特徴が一致する【写真 3】【図 1】。

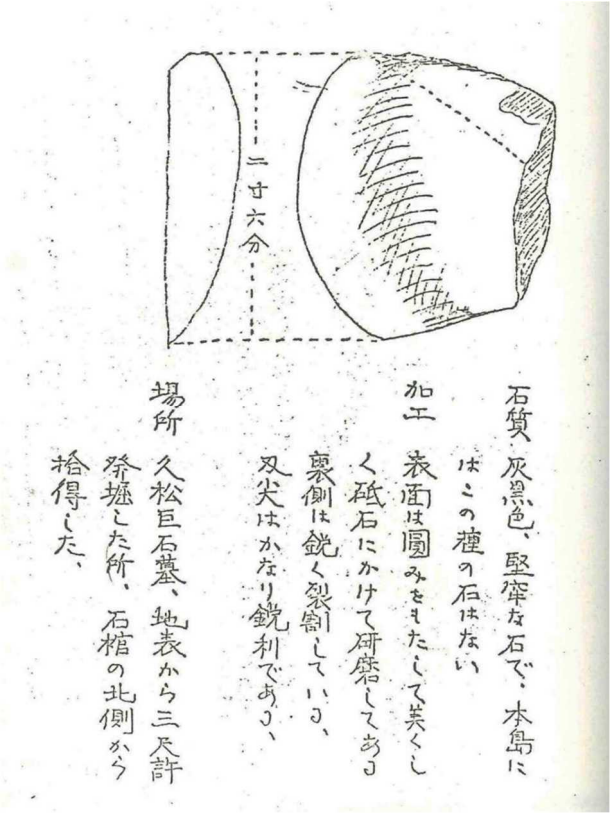


上【写真 3】H1-74
石灰岩製石器

左【図 1】『久松巨石墓発掘記録』にある同一資料と思われる「石錘」（稲村 1958:23）

この他、同文献にある「片刃の石斧破片」も、文献の記述と概ね一致する【写真 4】【図 2】。

【写真 4】H1-121　磨製石斧



【図 2】『久松巨石墓発掘記録』にある同一資料と思われる「片刃の石斧破片」（稲村 1958:22）

さらに、明確に同一資料であると判断できないものの、土器資料も稲村の記述と特徴が概ね一致する資料も認められる。

ここまで、資料より得ることができる情報について整理してきた。全ての資料の収集地や収集年月日を明らかにすることは困難であるが、今後の分析によっては収集地や資料の年代等、より詳しく明らかにすることが可能だろう。

こうした稲村資料の分析においては、稲村の研究活動が重要な手がかりになる。そこで次章では、稲村の研究活動のうち考古学的な発掘活動、遺物の収集活動についてまとめる。

３．稲村賢敷の発掘活動

稲村の発掘活動については、『琉球諸島における倭寇史蹟の研究』（1957）、『宮古島庶民史』（1957）『宮古島旧記並史歌集解』（1962）などに記述が見られる。それぞれの文献において、稲村は表採ないし発掘した遺物の種類や点数について具体的に報告しており、一部の文献には写真や図面もある。

本章では、稲村資料と稲村の発掘活動との対応関係を探るための手がかりとして、遺物について言及のある記述を挙げる 2)。

3-1. 稲村の発掘活動の概要

稲村のそれぞれの著作等における発掘活動とその成果について紹介する前に、文献からみる稲村の発掘活動の全体像を提示しておきたい。

本節における稲村の発掘活動は、稲村の代表的著作である『琉球諸島における倭寇史蹟の研究』、『宮古島庶民史』、『宮古島旧記並史歌集解』の他、出版物ではないが、宮古島市立図書館に収められている写真アルバム等にある情報を元にまとめたものである。

これらの研究活動の成果のうち、『宮古島旧記並史歌集解』には、「宮古々代史における倭寇の影響」、『久松巨石墓発掘記録』が所収されており、特に前者は、宮古島の複数の遺跡に言及がある。『琉球諸島における倭寇史蹟の研究』では、久米島から八重山諸島まで広い範囲の発掘成果、表採遺物に関する言及がある。これらの諸文献には、調査の年月日についても記録がある。

稲村の著作に基づき、発掘地についてまとめた表が、【表 2】である。

島名	遺跡名
宮古島	保良元島
	久松巨石墓
	上比屋山
	テラフグ
	後川遠見
	仲間御嶽
	やまと井
	南にゃーつみゃーか
	うまの按司宝倉
久米島	具志川城跡
石垣島	仲間丘
西表島	祖納
	祖納フチコ旧趾
竹富島	牛岡
波照間島	アラブチ城趾
	オヤミセ赤多那旧趾
	シムシ村旧趾
	スムタバル城趾
	名田大氏屋敷
	ナリヤ鍛冶趾
	フルブチ旧趾

【表 2】文献にみる稲村賢敷の発掘地

各文献には調査年も明記されており、各調査地を年代毎に並べたものが、【表 3】である。

年	月日	発掘場所
1949	2	保良元島
1954	5.18	上比屋山
	5	久米島
	—	宮国たいや一原
	—	保良元島
1956	8	竹富島
	9	波照間島
	9	西表島
1958	11.4～6	久松巨石墓
1961	4.1	テラフグ御嶽
時期不詳	—	てまか城趾
		きさま城趾
		佐敷城
		後川遠見
		やまと井
		仲間御嶽
		南にゃーつみゃーか
		うまの按司宝倉
		ミヌ島

【表 3】発掘年と発掘地

以上が文献にみる発掘活動である。発掘地は宮古島を中心としていることは言わずもがなであるが、波照間島での収集地点が宮古島以外の発掘地点と比較しても多い。遺物の収集時期は概ね 1950 年代である。

次からは、各文献における発掘調査の記述のうち、遺物の種類や点数に関する部分をまとめる。

3-2.『琉球諸島における倭寇史蹟の研究』

本書は、上比屋山遺跡が倭寇の拠点遺跡であること、「双紙」が倭寇ないし日本人移住者によってもたらされたものであること、の 2 点を主に論じた、稲村の代表的な著作である。

稲村の研究は、郷土史研究において考古学的成果を導入した点が大きな特徴であるが、本書もその稲村の研究姿勢のとおり、久米島、宮古島、八重山諸島にいたるまで幅広い地域の史跡を調査し、その出土品について言及されたものとなっている。

①上比屋山遺跡　御嶽前庭東方
竜泉焼の青磁破片 24（底部 2）
南蛮焼の破片 28
赤色粗製の土器破片 135
其他不明の磁陶器破片 44
（稲村 1957:90）

②上比屋山遺跡　御嶽北方、場内で最も高い場所の石垣付近
竜泉焼青磁の破片 5
南蛮焼の破片 25
赤色粗質の土器 160
陶土器の不明品 53
（稲村 1957:91）

③宮国たいや一原遺跡
竜泉青磁 22（内 15 屋敷内）
白磁の盃 1
乳色の磁器 7
乳色青釉の磁器 4
南蛮焼の破片 132（内 13 屋敷内）
赤色粗質土器 37
屋敷内とあるものは表面収集。
（稲村 1957:207-208）

④てまか城趾　城内中央部
ひび焼になった陶器破片 1
南蛮焼の破片 1
（稲村 1957:208-207）

⑤きさま城趾附近
数十個の破片（青磁又は南蛮焼の破片及び赤色粗質土器の破片）
（稲村 1957:227）

⑥保良元島　崖下の簡素な石垣の岩陰墓
青磁の食器破片 2
棺材と思われる杉板 1 片
（稲村 1957:238）

⑦保良元島の屋敷趾（元島御嶽の南）表採
石斧 2（粘板岩）
石槍 2（トラバーチン）
竜泉青磁の破片多量
南蛮焼破片多量
赤色粗質土器多量
（稲村 1957:238-239）

⑧石垣島仲間丘の居住地跡　表採
竜泉青磁破片　数十個（底部破片 13、椽部破片 11）
南蛮甕破片　多数　口縁部の破片 1
其他数種の支那製陶磁器の破片
赤色粗質土器破片　無数に散乱
（稲村 1957:289）

⑨竹富島牛岡（ンブフル、んぶうる）小波本御嶽、くつくば拝所周辺 700 坪　表採
青磁 40 余（内底部破片 11、椽部破片 6）
南蛮焼の破片 50 数個（内底部の破片 3）
赤色粗質の土器無数に散乱
（稲村 1957:311-312）

⑩波照間島ヤグ村旧跡「ししか殿」旧跡　表採
青磁破片 20 余（底部の破片 1、椽部の破片 6）
南蛮甕破片 10 余
はなれ焼無数に散乱
（稲村 1957:322-323）

⑪波照間島シモタ原城趾南　オヤミシヤ、アカダナの屋敷趾
青磁、南蛮焼及はなれ焼等の破片多数散乱
（稲村 1957:328）

⑫波照間島前村おやけ赤蜂の屋敷跡、名田大氏御嶽、ブスク旧跡、ナリヤ鍛冶の趾　表採
青磁破片 20 数個（底部 4、椽部 4）
南蛮焼破片 20 余個
はなれ焼無数に散乱
（稲村 1957:329-330）

⑬波照間島シムシ部落旧跡屋敷跡　表採
青磁破片 8（内底部 2、椽部 1）
南蛮焼破片 11（内椽部 1）
はなれ焼破片多数
（稲村 1957:331-332）

⑭西表島祖納半島慶田城「東屋の旧趾」屋敷趾周辺　表採
青磁破片 21
南蛮焼破片 29
支那焼の陶磁器類の破片 5 種
はなれ焼の破片多く散乱
（稲村 1957:335-336）

⑮久米島　具志川城跡
椽部の破片 89
茶色の青磁 10 種
淡青色ヒビ焼 8
淡い水色ヒビ焼 9
同色ヒビ無キモノ 21（紋アルモノ多シ）
淡緑色ヒビ無シ 17（紋アルモノアリ）
茶緑色ヒビ焼 2
同色ヒビ無キモノ 16 種
茶青色ヒビ焼 3
同色ヒビ無キモノ 3
底部破片 31
緑色 7
水色 13
茶青色 10
茶色 1
椽部及底部以外の青磁破片数十個
南蛮焼の破片数十個
他支那製陶器
（稲村 1957:354-355）

3-3.『宮古島庶民史』

『宮古庶民史』では、上比屋山遺跡、「うまの按司宝倉」、「南にゃーつみゃーか」が、発掘等

を行った遺跡として記録されている。このうち、上比屋山遺跡については発掘場所や遺物の点数など詳細について記述されている。

上比屋山遺跡の発掘は 3 カ所の発掘場所と、遺物の種類および点数が記されている。発掘場所は、①上比屋山城内、約半坪程を 2 カ所、②うまの按司御嶽、4 分の 3 ほどを 2 カ所、③前の屋御嶽、2 カ所の 3 カ所とされる。③前の屋御嶽の発掘場所は、遺物の点数に関する記述はなく、「竜泉窯磁器のような良質なものはない。南蛮焼や赤色土器破片の出土も前二カ所にくらべて著しく少ない」とある（稲村 1972:72）。

上比屋山遺跡の発掘場所のうち、①と②については、遺物の種類と点数が『琉球諸島における倭寇史蹟の研究』の記述と一致する。

ミャーカに関する記述では、遺物の点数の記述がない。宮古諸島における代表的なミャーカの記述があるが、発掘記録とその出土品についての記述は、「南にゃーつみゃーか」の記録のみである。このミャーカの北側を中心に発掘したとあるが、「人骨および馬骨等が到るところから出た」ほか、「西北部からは人間の頭蓋骨の一部が発掘された」ものの、「石器や土器破片は一個も見つけることはできなかった」とある（稲村 1972:126-127）。

3-4.「宮古々代史における倭寇の影響」

「宮古々代史における倭寇の影響」は、『宮古島旧記並史歌集解』に所収されている。

この原稿は 1961 年 10 月 14 日に行われた講演会の内容をまとめたものである（仲宗根 1996:101）。

本文献では、発掘成果と旧記の記述やアヤグの内容、さらには地名を分析しながら、与那覇原の一族がテラフグ御嶽を拠点としながら、荷川取ウプドゥマーリャ海岸を港として交易を行い、鉄を入手していたこと、与那覇原の一族が大きな勢力を持った理由が、こうした交易によって鉄等の資源や技術を入手していたことを論じている。

ここでは、3 カ所を発掘した際に得られた遺物の内容について記述されている。発掘地と遺物の点数は以下の通りである。

①テラフグ御嶽　拝所の西方 4m
　青磁破片 34
　白磁破片 9
　南蛮磁器 3
　南蛮陶器 15
　南蛮ガメ破片 45
　鉄塊（1 個は鍛冶跡の鉄滓）2
②後川遠見附近
　青磁破片　底部 12、其他 8
　南蛮焼破片　底部 4、其来（ママ）17
　鉄滓 1（後川遠見南麓仲間御嶽附近）
③「やまと井」附近の遺跡
　青磁　底部破片 15、其他の破片 38
　南蛮焼、陶器底部 8、磁器底部 5、南蛮カメ破片 13
　陶器製煙管口部 1
　鉄滓塊 1　同小塊多数

②後川遠見および、③「やまと井」附近の遺跡の資料は、表採資料とされる。

稲村は、上記の発掘調査に基づき、①平良北部、荷川取周辺に居住していた人々が倭寇の人々であること、②この地を拠点とした倭寇の交易によって島に鉄製農具、鍛冶技術が持ち込まれ、普及し部落が発達したことを論じている。

3-5.『久松巨石墓発掘記録』

本記録は、前節同様『宮古島旧記並史歌集解』に収録されている。また、ガリ版刷りの報告資料も総合博物館に収蔵されており、使用されて

いる写真が異なっている。図面もガリ版刷りの方がいくらか正確であると思われる。

内容は題名のとおり、昭和 33（1958）年 11 月 4～6 日に行われた久松のミャーカの発掘記録である。発掘されたのは「松原ぶさぎ」と「その西隣にある無名のみゃーか」である。稲村は、発掘地の選定について、久松のミャーカを代表する「赤宇立親のミャーカ」（文中では「あこうだて親みゃーか」）や、宮古最大規模のミャーカである伊良部島のスサビミャーカ、来間島の「あーすみゃーか」を、「将来宮古島にある巨石墓地を代表するものとして、保存する必要がある」とし、上記 2 つのミャーカを発掘対象としている。

発掘した遺物については、「五、墓地内から拾得された古器物の破片」において、一部図面をもって詳細に報告し、稲村の見解を述べている。以下に、報告された遺物についてまとめる。

石器類
①片刃の石斧破片
②石庖丁
③石錘
④石斧の粗製品
⑤粗製石槍の破片
土器類
①灰黒色粗質土器破片 3
②無釉の赤色粗質土器　薄手 4　注口 5
厚手多量
（稲村 1958）

3-6. その他

現在宮古島市立図書館に収められている稲村文庫の中に、稲村によって撮影された写真が貼られているスクラップブックがある。このスクラップブックに、「てらふぐ御嶽　与那覇原軍の城跡　一九六一. 四. 一」の文が添えられた写真がある。この写真の中央やや右に、小さく〇印が書き加えられている。場所に関する一文とは写真を挟んで反対側に、「〇印約一坪発掘　一. 青磁破片二一. 白磁破片九. 南蛮磁器一五. 南蛮甕二八. 小鉄塊二. 赤色粗質土器一一.」とある。先述の「宮古々代史における倭寇の影響」におけるテラフグ御嶽の発掘成果に関する記述を参照すると、1961 年 10 月の講演において、「私は去る四月に上地玄興さんや伊志嶺泰良さん達と一所（ママ）にテラフグ御嶽の発掘をしたことがあります」（稲村 1977:472）とあり、1960 年ないし 1961 年に発掘を行ったことが考えられる。この発掘がスクラップブック記載の発掘と同一のものと解釈もできるが、遺物の数が異なることに加え、宮古式土器に相当する「赤色粗質土器」の有無など、異なる点がみられ、判断が困難である。

4. 発掘活動と資料

ここまで、稲村資料の来歴および全体像、状態に加え、稲村の発掘活動について述べた。ここでは、稲村資料と稲村による発掘活動や文献との関係性に触れ、改めて稲村資料の性格について見解を述べる。

文献に見られる稲村の発掘活動と、稲村資料にみられる発掘地は概ね一致するものの、複数の発掘場所に差異がある。まず、文献に記録があるものの、稲村資料で確認ができない遺跡は、①てまか城趾、②南にゃーつみゃーか、③後川遠見、④仲間御嶽、⑤やまと井の 5 カ所が挙げられる。

稲村資料の中に存在するものの、現在文献上で記録が確認されていない遺跡は、①四島の主の墓、②石垣島大浜字大浜の 2 カ所である。

文献上には遺物の点数が記されているものの、遺跡によってはその数量も不明瞭で、文献上の点数に基づき遺跡を判断することは不可能とみ

てよいだろう。

しかしながら、稲村資料と文献上の発掘活動はほぼ一致しており、記録以外での稲村の発掘活動を伝える重要な資料であると評価できる。

おわりに

以上、ここまで稲村資料についてその概要をまとめるとともに、稲村の発掘活動に触れ、資料と記録の対応関係も探った。より細かな稲村資料の評価については、今後の資料そのものの分析によって果たされるべきである。

今後の展開としては、個別資料の精査はもちろんのこと、現在器種ごとにまとめられてしまっている資料を発掘地ごとで見直すことも必要である。資料そのものの分析はもちろんのこと、発掘地が明確判明している資料は、山本の分析のような、遺物の構成に着目し分析することも可能だろう。

稲村資料はすでに、貴重な宮古島の発掘資料であるが、今後の整理や分析次第で、新たな価値が付加されるであろう。

本稿は、これまで目録でのみ確認することができた稲村資料について改めて概要を紹介するとともに、稲村の研究との関連性を探った。記述不足の感は否めないが、すでに刊行されている目録と併せて、今後の資料の整理や研究の手がかりになれば幸いである。

註

1)宮古島市総合博物館の資料番号は、アルファベットによる大分類記号と、アルファベットの直後に付与される中分類の番号、個別の枝番号が割り振られる。現在中分類以下の枝番号は、資料収蔵時に付与される受入年－通し番号の「受入番号」が割り振られる（たとえば、2023 年に収蔵した 54 番目の資料であれば、23－54 となる）。歴史関係資料のうち考古資料が「H1」の記号を割り振られている。

2)ここでは、基本的に発掘活動と、これにより得られた遺物について言及があるものに限定して言及する。文献渉猟が足りず、不足している部分があればご教授いただきたい。

参照文献

稲村賢敷

1957　『琉球諸島における倭寇史蹟の研究』吉川弘文館。

1958　『久松巨石墓発掘記録』ガリ版刷複写資料、宮古島市総合博物館蔵

1972　『宮古島庶民史』三一書房。

1977　「宮古古々代史における倭寇の影響」『宮古島旧記並史歌集解』ぺりかん社。

下地和宏

2021　「倭寇と宮古について考える～『琉球諸島における倭寇史跡の研究』に学ぶ～」『宮古島市総合博物館紀要』第 25 号、宮古島市総合博物館。

仲宗根將二

1996　「稲村賢敷～その足跡と研究世界」『都研究』第 7 号 92-105、宮古郷土史研究会。

宮古島市総合博物館

2013　『宮古島市総合博物館収蔵資料目録―歴史資料編―』

山本正昭

2023　「コラム 10　稲村賢敷の発掘調査成果を再考する」『令和 5 年度沖縄県立博物館・美術館　博物館企画展　海を越える人々（前期）琉球と倭寇のもの語り』64-65、沖縄県立博物館・美術館。